

## ◆「公園何周走RUN（るん）？」と五色百人一首大会

### 港区磯路小学校区はぐくみネットの取組

#### 1. 「公園何周走RUN（るん）？」活動について

##### ・きっかけ

小学校では冬になると、耐寒マラソンなど、子どもの得意・不得意に関わらずに走る活動が実施されることが多いが、子どもにとってあまり楽しさは感じられないようである。磯路小学校の校長先生と当時のPTA会長が、互いにマラソン好きであることで意気投合し、子どもたちに走る楽しさを知ってもらいたい、子どもたちに長距離を楽しく走ってほしい、と校長先生とPTA会長の二人が休みの日に、学校の近くの公園で2時間一緒に走るだけという活動を始めた。最初は公園で遊んでいた子どもたちに声をかけて一緒に走るだけの会であった。



##### ・活動内容

2時間で何周走れたかの記録をしようということで、1周走るときに記録用紙に子どもたち自らが書き込むが、途中で遊びに行ったり休憩したりするのも自由、という学校行事でも地域行事でもない状態で2年間続いた。第3回目からは「磯路公園何周走RUN（るん）大会実行委員会」（代表はPTA会長、顧問は校長先生）主催で案内を出して参加者を募集し、何周走ったかの記録証を参加者に渡している。各学期に1回開催、暑い時期は避けている。

##### ・地域活動協議会の関り

最初は、活動中のケガなどに対応する保険の代金134円を徴収していたが、保険料の負担がしづらいケースもあるということで、4回目から地活協が予算面でサポートすることになって、子どもの参加者も100名を超えるようになってきている。はぐくみネットコーディネーターも兼ねる地域活動協議会の会長や地域の方々の理解を得て活動が継続されている。

##### ・大人の関り

当日は子どもだけでなく、保護者も一緒に参加することがあり、走り終わった後に記録台の片付けなどを自主的に手伝っていかれる方もいて、大人同士のつながりが生まれている。スタッフでの振り返り会を必ず行って、「良かった」という感想だけでなく、「こうしたほうがさらに良いのでは？」などの気づきを述べてもらうようにしている。そういう意見を持つ人に、次の回にはぜひその改善点を実施するスタッフになってもらうように、声掛けしているということだった。

#### 2. 五色（ごしょく）百人一首大会

##### ・五色百人一首とは

百人一首のかかるた100枚を、1番から100番まで20枚ずつを一組として五組に分け、一組の札

の縁や裏を同色にして、五色にした百人一首のセットがある。磯路小学校では、今年はこの色の札でカルタ会をする、と決めて実施している。100枚全部でないので、対戦時間も短縮でき、覚えるのも負担感が減る。



- ・はぐくみ体験事業として

学校で百人一首が盛んであるということから、日本の伝統文化である百人一首を地域の方に見守られて体験することを目当てとして、地域行事として実施することになり、令和4年12月17日(土)に第1回大会を学校の講堂で開催した。予選リーグから勝ち上がった子どもたちが、決勝トーナメントで対戦する。各対戦の審判は地域の方々が務める。3位決定戦や決勝戦は参加者全員が見守る中で行われる。第1回大会では決勝戦は2年生と6年生の対戦で、2年生が優勝。社会福祉協議会の支援で立派なトロフィーも用意された。

- ・行事の効果

学校での学習活動の一環が、地域の行事に繋がり、子どもたちの達成感高揚につながった。また五色百人一首というアイテムを使用することで、大人も子どもも負担感を軽減しながら伝統的な文化に触れやすくなり、日本の古典の素養が知らずに身につけているということである。



第2回大会の様子



第2回大会優勝決定戦

### 3. 活動全体について

- ・課題

人材の確保が課題で、PTA役員からはぐくみや地域活動の担い手が育つことが多いが、そのPTA役員のなり手に困っている状況である。ちなみに「走RUN」を始めた当時のPTA会長は、この行事の継続を願って令和5年度のはぐくみネットの委員長に就任した。役職の人が変わったら行事もなくなっていく、ということがないようにという思いである。校長先生も「走RUN」会の顧問で、異動などがあっても協力していくということであった。

- ・人材確保の手法

「参加者から担い手に」ということを常に意識して、声掛けなどを行っている。行事が終わったすぐ後に必ず振り返る時間を作って、その日の問題点や改善点を発表してもらう。その気づきのあった人に次に行うときにそのことを担うスタッフになってもらう、という方法を取っている。ただのお疲れさん会にはしないことが大事である。

学校と地域の関係が良好で、地域行事には管理職の先生だけでなく、一般教員も自主的に参加している。参加した後に互いに「楽しかった」という感覚が残ることが大事で、この取り組み方が学校と地域の連携を考えるうえで、重要である。

聞き取り日：令和5年10月17日(火)